

悪だくみ

まだ独り身の息子が、大切にしているお猪口がある。

渋い銀色の錫製だ。

錫の酒器で日本酒を飲むとおいしさが増すらしい。

金銀と同様に毒性は全くなく、錫がまろやかな味わいに変化させ、熱伝導性が優れていて「熱爛は温かく・冷酒にすれば冷たく」馴染む器という。また手で変形することもできる不思議な代物。しかも、これは名だたる「能作」製だと能書きを垂れる。

どれどれと、昔は同じように酒器を集めて酒豪として少しは鳴らした僕も手に触れさせてもらったが、表面に微妙な凹凸のあるしっとりとした質感で、ズンと手応えのある重みが掌にすっぽり納まる、気持ちの良い酒器である。

彼は根っからの日本酒党で、妻が定期的に取り寄せているセット買いと別には、それもかなりの銘酒を仕込んで来て、ほんの僅かなつまみを箸先に乗せてチビリチビリと飲む。

僕は病気をしてからアルコールを絶っているが、妻はたしなむ。妻と僕と、息子の三人が揃う際には、「今日もまた旨いなあ！」などと妻と息子の二人がつまみなのか酒なのか、料理のことを愛でているのか、共にうなずきながらの食卓となる。

そして一応妻の手料理を褒め讃えて、ディナーはジ・エンド。食後の片付けは最近息子と僕が行う。僕が先に台所のシンクを前に食器を水洗いしていると、「ご免ねなどとねぎらいながら、息子が空になった食器をせつせと運んで来る。運んで来るだけで洗わない。テーブルに戻ってみると、すでにほとんどの食器は運び終えて、



あとは相変わらず妻が独り、小振りの青い江戸切子で梅酒をゆつくりたしなんでいる。

おかしいのは、その食後のテーブルや台所で、さんざ息子が手にしていた筈の自慢のお猪口の姿を何故か見かけないことだ。

ある日、そのことを妻に云ったところ、

息子の部屋を指差し、両手で拭いているゼスチュアをしながら食器棚を指差し声をひそめて「自分で拭いて食器棚に入れてる」と云う。つまり、僕らが気付かぬ間に手にしたお猪口を自分でシンクに運んで自分で洗って自分で拭き、食器棚にそっと納める。僕らには一切手を触れさせないようにしていると云うのだ。なるほど、どおりで何処に消えたのか？分らないはずだ。

思わず唖ったが、すぐさま僕は一計を案じたくなった。

彼が出勤の日の夜遅めのテーブルに、あらかじめセットして置く皿物やお椀物の料理の脇に、その錫製のお猪口をおつまみで満たした「入れ物」にしてそっと置いとく、さらに錫は可変性と云っていたからついでに思い切って形を歪ませたりしちゃって。

どうなるだろう？